

Title	当事者研究と社会学的感染力：当事者研究と社会学との出会いのさきに
Sub Title	
Author	小倉, 康嗣(Ogura, Yasutsugu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.55- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：生きられる経験/当事者/当事者研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

当事者研究と社会学的感染力

——当事者研究と社会学との出会いのさきに——

小倉 康嗣

1. 当事者研究の感染力と生きられる経験

このシンポジウムで、当事者研究について共同で報告された綾屋紗月さん・熊谷晋一郎さんと私が出会ったのは、いまから5年ほど前だっただろうか。私がフィールドワークかたがたスタッフとして入っていた（老若男女入店歓迎の）ゲイバーに知人といらしていた。そのとき綾屋さんは手話で話をされていたので、聴覚障害の方なのかなと思っていた。が、あとから話をうかがったり、著書に書かれていた情報などから、身体の内外から部分にフォーカスした情報をバラバラのまま大量に摂取してしまい（感覚飽和、なかでも聴覚飽和）、自己感が安定しないため、手話で話されていることがわかった。綾屋さんはその苦しみを、「不確実な世界に生き、すぐに自分がほどけてしまう苦しみ」（綾屋・熊谷 2010: 37）と表現している。そのことによって、他者と体験を共有できない、他者とながれられないという気の遠くなるような孤独感。「世界とつながっていない感覚が高じて、『はたして自分の感じていることは本当にあるのだろうか』と自分の感覚に確信が持てなくなり、『そもそも自分は確かに存在しているのか』『自分は何者なのか』という実存感覚まで危うくなっていく」（同上: 42）苦しみである。

その後、お二人の著作（綾屋・熊谷 2008; 熊谷 2009 など）を読み、私はどんどん引き込まれていった。なぜなら、綾屋さん・熊谷さんによって展開されていく当事者研究のプロセスが、私自身の社会学の原点でもあるセクシュアル・マイノリティ経験、すなわち存在不可能な自己が存在可能になっていくプロセス、生きてちゃいけないと思っていた自分が生きてていいんだと思えるようになっていったプロセスと、多くの共通項をもっていたからである。綾屋さんは、当事者研究への糸口を見つけたときの経験を、つぎのように述懐している。

私が当事者研究への糸口を見つけたのは、30歳を過ぎた頃、自分にそっくりな生活を送っている自閉症スペクトラム（アスペルガー症候群）当事者の手記を読んだときだった。これまで専門家が書いた自閉症スペクトラムに関する書籍や、自閉症スペクトラムの診断基準である「社会性の障害」「コミュニケーションの障害」「想像力の欠如」といった文言を読んだときはピンとこなかったが、当事者の具体的な発生パターンを語る言葉は、「自分の体験は本当なのか」「思い込みではないのか」と苦悩してきた私の長年の体験を適切に表す言葉として、抗いようもなくすると入り込んできた。それは当事者の言葉に「感染した」ともいえるような状況だった。（綾屋 2013: 202）

小倉康嗣「当事者研究と社会学的感染力 —当事者研究と社会学との出会いのさきに—」
『三田社会学』第19号（2014年7月）55-69頁

それは、私も同じだった。1980 年代、ホモフォビア（同性愛嫌悪）の闇が現在よりもはるかに深かった時代に、ありのままの自分に向き合おうとすればするほど、私という人間は存在不可能（透明な存在）になっていた。そんな折、私はテレビである深夜番組を見ることになる。そこには自らが同性愛者であることを表明し、そのセクシュアリティを肯定的に生きている人びとが映っていた。当時、それは驚くべきことであった。それまでは、専門家による「性的倒錯」の物語によって一方的に裁断されるか、キワモノ扱いでしかなかった同性愛者が、そのとき初めて人生を主体的に生きる「人間」として登場していたり。精神医学者など専門家といわれる人たちと対論していたが、そこに登場した同性愛者の人たちの「生きた」言葉のほうに圧倒的に説得力があったし、なによりも私にはリアルだった。それは、閉ざされた魂の扉がいつきに開かれていくような経験で、その興奮は、まさしく当事者の「生きた」言葉に感染したというべきものであった。

また、新聞もろくに読まない同性愛者の少年が、存在可能を求めて藁をもつかむ思いでいろんな書物を読み、しかしどの専門書を読んでも自分のことを肯定してくれるテキストを見出せなかった（どんな専門知も自分を抑圧していた枠を補強こそすれ、相対化してくれなかった）とき、その枠に切り込みを入れてくれたのは、専門書＝専門知ではなく、著者自身の生きられた生が、あるいはこの世を生ききった人間の生が描かれた自伝やドキュメンタリー、文学などの「作品」であった。このような生きられた生の上に立った「作品」では、時代を超えて、すでにこの世にいない他者の生とも出会える。たとえ同性愛のことを肯定する記述がそこになくとも、いろんな時代に、いろんな人が、いろんな業を背負って、いろんな生き方をしていることを追体験できる。それが私に存在可能の感覚をもたらしていった。

このような感染的な経験が、私をがんじがらめにしていた（社会の都合によってつくられた）枠を、そして社会を相対化する眼を見開き、「これでも生きられるんだ」という「生きる力」を与えてくれた。その後私は、そのプロセスが社会学そのものなのではないかと考えるにいたり、いったん就職した仕事を辞めて、社会学の道に入っていくのである（小倉 2006, 2014）。

他方、綾屋さんはその後、「専門家の描写や言説をいったん脇に置き、他者にわかるように自分の体験を内側から語る作業」（綾屋・熊谷 2010: 106）を仲間とともに始める。Necco 当事者研究会である。自分がいま苦勞していることやそれに対する身の処し方を、専門家や既存の知に預けるのではなく、自らの研究テーマとして提出し、仲間の力を借りながら、その苦勞をいろんな方向から眺め、自分を助ける知としていく。そうやって生きづらさや苦勞の機制を知ることによって、それをよりよい生の契機としていく——当事者研究を私なりに定義するとこんな感じになるが、このような営みを仲間とともに実践する場である。「等身大の自分と仲間との相互作用の中で、一つずつゆっくりと物事が更新していくことそのものが貴重な体験であり、そこに毎回、新鮮な喜びを感じている」（Necco 当事者研究会 2013a: 290）と綾屋さんはいう。

ゲイバーで出会ってから 2 年後、私の授業のゲストスピーカーとしてぜひ学生たちにご自身

の経験を話していただきたいと思い、綾屋さんと熊谷さんにラブレターを送ったところ、即答でご快諾いただいた。以来、毎年のように授業に話しに来ていただいている。そこでは、あの自己感が安定せず、手話を使ってやっとな話をしていた綾屋さんが、大教室に集まった大勢の学生を前にたったひとりでマイクでスピーチし、学生からの質問にも堂々と（ほとんど完璧に）答えている。見違えるようだった。「どうして、こんなに？」という私の問いかけに、綾屋さんは「当事者研究会を始めたことが大きいと思う」と答えた。綾屋さんは、あくまで（これ見よがしではないという意味で）淡々と話をし、学生たちの質問に答えていたが、その淡々とした立ち振る舞いから発せられる存在感に、当事者研究の感染力の大きさを見せつけられるような思いだった。その変化を、綾屋さん自身は以下のようにとらえている。

私がずっとガラスの向こう側に他者を感じてきた理由は、おそらく「全体よりも部分にフォーカスした情報をたくさん摂取する」という特徴だけにあるのではなく、そのような体験が誰とも共有されなかったことや、周囲の人々にとっては当たり前前の体験や文化が私の身体に感染しなかったことも、大きく影響しているだろう。なぜなら現在も「全体よりも部分にフォーカスした情報をたくさん摂取する」私の特徴は変わらないが、当事者研究によってその特徴を他者と共有し、感染し合い、「そんな特徴を持った自分」と俯瞰する自己が生まれたことで、今の私は劇的に他者とつながれているからである。（綾屋 2013: 215）

この文章にも、さきの文章にもたびたび出てきた「感染」という言葉は、当事者研究のキーワードであり、魅力であるといつてよいだろう²⁾。さきの綾屋さんの言葉にあった「等身大の自分と仲間との相互作用の中で、一つずつゆっくりと物事が更新していく」ことの「新鮮な喜び」。それが、当事者研究の感染力を醸成している。

そしてこの綾屋さんのいう「等身大の自分」の感覚とは、このシンポジウムのキーワードとなっていた「生きられる経験」そのものである。M・ヴァン＝マーネンは、「生きられた経験」へ継続的な関心を向けることは「事象そのもの」へ向かうことであり、「生きられた経験の現象に向かうことは、世界についての基礎的な経験を呼び覚ますことで世界をみる見方をもう一度学ぶことである」（Van Manen 1990=2011: 60）という。さきの「専門家の描写や言説をいったん脇に置き、他者にわかるように自分の体験を内側から語る作業」とは、自らの「生きられた経験」を伝える作業である。

当事者研究発祥の地・浦河べてるの家の言葉を借りれば、当事者研究では「専門家の権威化」もしないが、当事者の抱える病や障害という「経験の権威化」もしない（向谷地 2009: 48）。「自分のことは、自分がいちばんよく知っている」ではなく、「自分のことは、自分がいちばん“わかりにくい”ことを知っている人」（同上: 44）として当事者をとらえる。自らの「生きられた経験」＝「事象そのもの」を覆い隠す「専門家の描写や言説をいったん脇に置き」自

分自身で考えるわけであるが、自分自身の思考だって自明視され、「生きられた経験」＝「事象そのもの」を覆い隠すものになってしまうかもしれない。だから、他の自分自身で考えようとする仲間と、「自らの生（生きられた現実・経験、実存的なポジショナリティ）を背負って……『学知と現実が分かれていく以前の経験的土壌』に降り立って異化しあう生成的コミュニケーション」（小倉 2012: 58）をおこなうことで、「世界についての基礎的な経験を呼び覚まし、「事象そのもの」＝「生きられた経験」に迫るのである³⁾。「自分自身で、共に」という当事者研究のキャッチフレーズ（向谷地・浦河べてるの家 2006）は、そういった含意をあらわしたものである。

このようなコミュニケーションのなかで、自らの生きられた経験が、他の仲間の生きられた経験と交差し、受けとめられ、呼び覚まされ、立ち上がっていく。その〈生きられた経験との出会い性〉＝〈生きられた経験に出会うという生きられる経験性〉こそが、「新鮮な喜び」をもたらしている。当事者研究の感染力は、このような〈生きられる経験性〉にあるとってよいだろう。

さきの私の「ありのままの自分に向き合おうとすればするほど、私という人間は存在不可能（透明な存在）になっていた」自分が、他者の「生きた言葉」への感染によって存在可能となっていたセクシュアル・マイノリティ経験も、この問題意識（意味感覚）を共有している。だから私も当事者研究に引き込まれていったのだと思う。私自身、この日のシンポジウムにも来てくださっていた Necco 当事者研究会の仲間の方々（以下、僭越ながら「仲間たち」と呼ばせていただく）とも交流をずっとさせていただいているが、それはじつに楽しい。仲間たちと話していると、自分の等身大の経験や実感を表現する言葉が、融通無碍に紡ぎ出されていくようなワクワク感と喜びがある。それが生きる力を引き出してくれる。その意味でも、私自身、当事者研究には強く共感し、大きな可能性も感じている。

2. 三極化する反応

しかしその一方で、「仲間」の外部に目を向けてみると、その反応は分極化するようである。昨年（ちょうど本シンポジウムの 2 週間ほど前）、私が大学で担当していた「コミュニケーション論」というタイトルの授業に、綾屋さんと Necco 当事者研究会の仲間たちをゲストスピーカーとしてお招きして、発達障害当事者研究について話していただいた⁴⁾。そのときの学生たちの反応は、比率の違いはあるものの三極化した。

ひとつの極は、綾屋さんや当事者研究会の仲間たちの話に文字どおりに「感染」し、自分と切り離された問題ではなく、自らが抱えている問題との地続き性を感じ、自分ごととしてとらえる学生たちである。たとえば、綾屋さんの話が終わって質疑応答の際、「自分はツイッターが嫌いなんです」と、おもむろに発言する学生がいた。自分のつぶやき（発言）がいろんな人に見られていることに対して、周りの人たちがどう思っているのかを敏感に考えすぎてしまう自分がいて、自分のことを自意識過剰だと思って生きてきた。顔が見えないからこそ相手の

感情を考えすぎてしまう。その不安をどうしようかと思ったときに、当事者研究というほどのものではないが、自分がなんでそういうふうになるのかということをも自分なりに考えてみるのがいちばんてっとり早い手段だと思い、自分の過去の経験をいろんな角度から振り返ったという（その具体的な経験もそこでは発言してくれた）。そしてある結論が出たときに、自分の見えない不安やもどかしさが消えた感じがした。それがじつは、ある意味で当事者研究をやっていたんだなというふうに思った。

また別の学生は、「コミュ障」（コミュニケーション障害）だとか、「コミュ力」（コミュニケーション能力）だとか、「ぼっち」（ひとりぼっち）だとかいう言葉が巷にあふれており、そういう言葉が独り歩きして、ちょっとしたことでそういった言葉に翻弄されてしまうと、とつとつと発言しはじめた。まさに自分も「ぼっち」であると。一方でそういったことを軽いノリで話さないといふと引かれてしまうところがあって、大学では友だちづくりに失敗したけれども高校までの友だちはいるので、そういう友だちにいかにか自分が大学で「ぼっち」かと笑い話にして話してしまう。本当に悩んでいる人の言葉が重すぎて、押しこめられて、追いやられる状況がつくられないか心配だと、絞り出すように発言した。その学生は後日、そのときのことを「講義の履修登録をした際は、シラバスに『対話を重視』といった旨が書かれているのもあって、『口下手な自分で大丈夫だろうか…』と不安だったのですが、どうにかこうにか、皆のいる前で質問するという、（自分の中で）世紀の大快挙まで成し遂げられました」という感想を寄せた。

これらの反応は、まさしく当事者研究の「感染力」をあらわしている。このときの学生の反応については、当事者研究会の仲間たちも、「自分と同じ問題だ、年代も状況も違う学生さんと同じ問題だと思えた」との感想を寄せてくださり、とても手応えがあった。授業後、夜8時近くまで居残って仲間たちと話をした学生もいた。

しかしながら他方、もうひとつの極というべきか、自分ごととしては無関係・無関心な反応を示す学生たちもいた。綾屋さんや当事者研究会の仲間たちに話をさせていただいた授業の翌週に、1コマを使って、即席のグループをつくって学生たちに議論をさせた。掲げた議題は「なにが問題なのか」「それを自分自身の問題としてどう受けとめるか」「それは自分自身の『ものの見方・考え方・感じ方』『生き方』『つながりと生きる場』の問題とどう関わっているのか」であり、さらに時間があればそこから「どのようなコミュニケーションが必要なのか」「どのようなコミュニケーション環境が必要なのか」についても議論するよう指示した。

ところが、終始「あの障害者の人たちは…」というとらえかたで議論が進んでいくグループがいくつかあった。いかにか自分ごととしてとらえるかということをも課題として出してはいても、「なにが問題か」となったときに、「“あの障害者の人たち”をどういうふうに社会に取り込むべきか」という議論になっていく。「取り込むべき社会」において自分たちが地続きの土俵に立っているという感覚をもてず、自分と切り離された問題としてとらえ、一般論の水準でしか議論をしない層である。

3つめの極は、苛立ちを見せながら批判する学生である。たとえば、この授業前後に資料として配布していた発達障害当事者研究に関する綾屋さんの文章に対して、「『こんな私だけ別にぜんぜん悪くないもんね』といった自己肯定のために書かれた文章のように思えた」「結局のところ『もっとワタシにやさしい社会になってほしい!』と主張しているように思えて、何回も読み返しているうちにだんだん苛々が募ってきた」といった反応をみせる。もっとも、これは感情的に反応しているわけであり、ある意味で無意識下では自分ごととして感じとっているといえるのかもしれない(その学生は、親の敷いたレールによって競争を勝ち抜いてきたが、途中むなしくなってバーンアウトしたという経験を背負っていた)。だが、それを自分と地続きな問題として「研究」し、自らを開いてワクワクしていく方向ではなく、綾屋さん・当事者研究会の仲間たちと自分とのあいだに一線を引いてしまい、自らを閉じていく方向に向かっていったようである。

むろん、当事者研究それ自体は、開いていく営みである。「独りよがり」にならないために、仲間を開く。「一人で自分の語りを作ろうとするとときに陥りがちな問題は、独りよがりでは他者に通じない言葉になってしまうということだ」(熊谷 2013a: 260)という熊谷さんは、「『本人』研究や『自己』研究ではなく、『当事者』研究という用語を採用する趣旨は、この実践がひとりきりの内観ではなく、差異をはらんだ、しかし類似した者同士の共同性を背景にして行われるという点を強調するところにある」(熊谷 2012: 98)と述べている。しかしながら、上述の苛立つ学生は、当事者研究は「独りよがり」ではないけれども、もしかしたら「仲間よがり」であるようにイメージしてしまったのではないだろうか。

3. ポジショナリティの「生きられる」対話・連携——〈社会学的感染力〉へ

(1) 社会学的感染力

このような、2つめの極、3つめの極のような反応をする層に対して、「あなたも当事者なんだよ」「あなたもワクワクできるんだよ」というように、当事者研究がもっている感染力をいかに展開していくことができるのだろうか。

たとえば、上述の苛立つ学生に対して、発達障害当事者研究の実践が、じつは苛立つ自分自身への肯定や自分自身にもやさしい社会の構想につながっているのだ、という社会的文脈への「感染力」をどう宿していけるのか。さらには、「あの障害者の人たちは…」というように自分とは切り離された問題としてとらえる学生たちにとっても、たとえば(これは授業で解説していることなのではあるが)ポストフォーディズム的状况のなかで、コミュニケーションまでもが競争の道具となっている。そんな社会的状况のなかであなたが煽られていることと「発達障害」と呼ばれている人たちが背負っている問題とは地続きであり、その意味で「発達障害」と呼ばれる特定の人たちの限られた問題ではなく、自分自身のコミュニケーション観(ものの見方・考え方・人間観)の問題として、そしてそのようなものの見方によって自分自身を生きづらくしている(まさしく自らが生きている)社会の構造的な問題としてつながっているのだ

——そういう社会的文脈への認識を、たんなる知識としてではなく、自らが切実に関わっている問題としていかに体得できるのか。そしてそこから、どのような新たな関わりを構築できるのか。つまり、「当事者性」をとらえなおしながら、当事者ではないと認識している人びとの問題に、どのようにつなげていけるのだろうか。

そのためには、より広く・深い社会的文脈への感染力が必要となってくるだろう。かつてC・W・ミルズは、「個人環境にかんする私的問題」を「社会構造にかんする公的問題」に接合して把握する知的資質を「社会学的想像力」と呼んだ（Mills 1959=1995: 10-14）。ここで問われているのは、その「社会学的想像力」を、いかにして〈生きられる経験性〉（＝当事者研究が有しているような「新鮮な喜び」たるワクワク感・切実感）を宿したコミットメント可能なものとしていけるのか⁵⁾、である。自らも地続きの土俵に立っているという社会的文脈を、ワクワク感・切実感＝〈生きられる経験性〉を手放さずに、いかに読み込ませられるのか。この意味で「仲間」以外の他者に感染していく言葉を、いかにもちうるのか。そういった課題が、当事者研究の次なるステージに、そして当事者研究と社会学との出会いのさきに、待っているのではないだろうか。それは、「社会学的想像力」からもう一步踏み込んだ、いわば〈社会学的感染力〉というべき力である。

これについては、Necco 当事者研究会に参加しているあひるさんの以下の「驚き」に注目すべきであろう。

発表が終わると自分が知っていると思っている経験自体が変わるし、見え方が変わるよね。発見は聞く立場のときにもあって、私はテーマを事前に聞いて「自分とは違うだろう」と思って全然期待せずに行ったのに、思いきり自分のことが話されているみたいで驚いたことがある。（Necco 当事者研究会 2013b: 300）

こういった「驚き」が、「仲間よがり」のイメージを超えて、当事者ではない（関係ない）と認識している外部にいる人びとにも〈生きられる経験性〉をもって感受できるよう橋渡しをする力。それが〈社会学的感染力〉である。それは、自分ごととしてとらえる当事者性を、より広く・深い社会的文脈へと展開していくことを意味する⁶⁾。

（2）ポジショナリティの「生きられる」対話・連携

その点で、本シンポジウムのシンポジストメンバーは、絶好の組み合わせであったように思う。なぜなら、当事者の等身大の経験や生きられる経験の重要性を認識しながらも、そのポジショナリティは絶妙に「同じでもなく、違うでもなく」（綾屋・熊谷 2010）という組み合わせになっており、それらをうまく対話・連携させれば、上述したような当事者性の「より広く・深い社会的文脈への展開」を展望できるかもしれないからである。

僭越ながら、私なりにそれぞれのポジショナリティを整理してみるならば、綾屋さんは、当

事者が当事者のことを当事者の立ち位置から研究するというポジショナリティであろう。そして熊谷さんは、脳性まひ（身体障害者）という異なった当事者性をもった人が、半分当事者（あるいは「痛み」など別の方向から見た当事者（熊谷 2013a））・半分研究者（それは研究者言語を使った発表からもうかがえる）の立場で研究されている。そういう綾屋さんと熊谷さんがコラボレーションして、この当事者研究（の研究）をされている。

3 人目のシンポジストであった宮下阿子さんは、摂食障害である（であった）当事者が、摂食障害当事者のことを、あえて調査研究者という立場から研究されている。当事者でありながらも、他者性を挿入するために調査研究者としての自己を手放さずに研究しておられる。

4 人目のシンポジストであった澤田唯人さんは、研究者（感情社会学者）が、当事者の生きられた経験を、研究者の立場から研究されている。ただし「われわれはすべて社会学者だ」と述べられていたように、ここにいう研究者は、生きられた経験（ままならない感情）を宿した当事者の身体と地続きである。

このとき、それぞれのポジショナリティから固有に見えてくるものを、いかに（感染力を手放さずに）対話・連携させていけるのか。それがここでの課題となる。ふたたび当事者研究の言葉を聞こう。

……やり取りを通して仲間の言葉が自分の中に蓄積されていく。仲間といってもまったく同じということはもちろんない。あくまでも、仲間の言葉のうち、自分にも当てはまる部分だけが引用され、次に自分が語る際に、それらが自分の語りの中に組み込まれることで、仲間の言葉が受け継がれていく。こうして仲間の助けを借りながら、各々が自己感を立ち上げることになる。それを繰り返すうちに、多くの仲間に賛同・引用された言葉が多用・共有されて、「仲間全体の言葉」すなわち構成的体制が立ち上がっていくのである。

（綾屋 2011: 60）

この「仲間全体の言葉」（構成的体制）は、「定着」するものではなく、第 1 節で言及した綾屋さんの言葉にあったように「等身大の自分と仲間との相互作用の中で、一つずつゆっくりと物事が更新していく」（Necco 当事者研究会 2013: 290）という「生成」的なものである⁷⁾。この生成性が「貴重な経験」「新鮮な喜び」（同上）となり、生きる力につながっていくのである⁸⁾。

当事者研究がもつこの生成的ダイナミズムは、当事者研究の「感染力」＝〈生きられる経験性〉の肝であると同時に、当事者研究が、当事者「運動」や単なる当事者「主権」ではなく、当事者「研究」であることのゆえんでもある。当事者研究というと「当事者」という言葉のほうに目を奪われがちであるが、「研究」であることが決定的に重要である（小倉 2012: 59）。それは、「健常者」というモデルを設定し病気や障害を治すべきものとしてとらえる「治療の論理」でも、理解のない社会に対抗するためにコミュニティ内では一致団結しなければという

合意形成（同化）が目指される「運動の論理」でもない（綾屋・熊谷 2010: 125）。「違いを認めたままつながるために必要な『構成的体制と日常実践の相互循環』そのものを具体化」する「研究の論理」（同上: 124）である。それが上述の生成的ダイナミズムをもたらしている。この「違いを認めたままつながるために必要な『構成的体制と日常実践の相互循環』」とは、Necco 当事者研究会のミナリさんのつぎの言葉に端的にあらわれている。

「私のことを知ってほしい」と思う宛先としての他者とは全然関係ない他者がぜったい必要だってことが、参加しているうちにだんだんわかってきました。他者がいる中で話すことによって客観性を少し入れた中で「どうすればあの感じが通じるかな」と考えながら言葉を獲得していくことによって、結果的には人とつながることができる気がしています。

（Necco 当事者研究会 2013b: 299）

そして、ここにいう「他者」のなかに、異なったポジショナリティを背負った他者が入り、対話・連携していくことが、「仲間よがり」のイメージを超えていく契機になるのではないだろうか。

私は長年、ライフストーリー研究をおこなってきたが、ライフストーリー研究も当事者の「生きられた経験」をなによりも重視し、そのストーリーを聞き、記述していく研究であるという意味で、当事者研究と多くの、そして深い接点があるとずっと感じている。だが、ただ単に当事者の語りを記述すればよいとは思っていない。また当事者が自ら語り出せばそれで事足りるとも思っていない。ライフストーリーとは、異なったポジショナリティを背負った語り手（調査協力者）と聞き手（調査研究者）との相互行為の積み重ねによって生成されるものだからである⁹⁾。この点については、以下のように書いたことがある（「調査協力者」を「当事者」と読み換えていただいてよい）。

……私は、調査協力者の語りを垂れ流しすればいいといっているわけではない。調査協力者の語りを、先人の知を継承し長期的スパンで生や社会を捉える訓練を積んだ調査研究者がきくことによって、調査協力者の語りが拡がりや深さをもったものになる。逆に、調査研究者が調査協力者の「生の全体性」に接近するように語りをきくことによって、調査研究者の認識や使っていた道具立てが問いなおされていく。そういった、異化し異化される経験的コミュニケーションの積み重ねこそが……「生を創造的に捉えること」「人びとの生や社会関係をより豊かに理解していくこと」につながっていくのであり、そのプロセスを開示し読者とコミュニケーション可能にしていくことが「経験的な検証による生成的前進」につながっていくと主張したいのである。（小倉 2011: 152）

ここで述べた「経験的な検証による生成的前進」とは、じつは当事者研究が標榜する複眼化と

いう客観性¹⁰⁾にも通ずるものだと私は思っている。それを、上述のような異なるポジショナリティからの「異化し異化される経験的コミュニケーションの積み重ね」によって、「仲間よがり」のイメージを超え出た社会的文脈へと架橋していくということである¹¹⁾。

だが、このときのいちばんの問題は、さらにそのさきにある。「仲間」の外部の人びとに対しても「感染力」が及ぶように、つまり、いかに〈生きられる経験性〉を宿したかたちで社会的文脈への架橋を実践していけるのか、である。ふたたびヴァン＝マーネンの言葉を借りれば、〈生きられる経験性〉は、単に「経験を概念化するのではなく、我々がそれを生きるように経験を探究すること」「我々が真剣に関心を持っている現象、我々を世界に関わらせている現象へと向かうこと」(Van Manen 1990=2011: 59)に宿る。換言すれば、「それぞれのポジショナリティから固有に見えてくるものを対話・連携する」というときに、それをいかにこのような「生きられる」ものとして実践していけるのか。いわば〈ポジショナリティの「生きられる」対話・連携〉という課題である。では、どうすればよいのだろうか。

ひとつ考えられるのは、異なったポジショナリティに立つ、たとえば(カテゴリー的な意味では)当事者ではないと自己認識している調査研究者が、上述のような「異化し異化される経験的コミュニケーション」を積み重ね、自己変容(=調査研究者としての枠組/調査研究者以前の生活者としての枠組¹²⁾が変容)していく〈調査経験プロセス〉こそを、生成的に記述していくことである。それは、調査関係において生成する生きられた経験を、読み手が追体験できるような記述の試みだといってよい。

(3) 表現の問題へ

かつて私は、そのような試みを、拙著(小倉 2006)においておこなったことがある。老いの季節を迎えんとする「団塊の世代」前後の現代中年と、30代(調査当時)でゲイでもある調査研究者が、それぞれに社会と対峙した経験をたずさえ、出会って生成される新たな人間存在の地平。それをめぐって「研究対象の経験と研究者自身の経験との出会いのプロセスをも含めた『〈経験の実践のプロセス〉としての調査過程』それじたいを、ひとつの社会過程として位置づけて当該研究のフィールドとし、『作品』に刻み込んでいく試み」(小倉 2006: iv)である。「インタビュー(社会調査)じたいが人間生成のプロセスなのであり、そこに、調査協力者である現代中年の人びとと、調査研究者である私の再帰的な社会化のプロセスが発現している」(同上)と考えてのことであつた。と同時に、「これら調査研究過程の描写をめぐるさまざまな仕掛けは一種のパフォーマンスであるともいえ、読者の経験への働きかけということも意識して」(同上)いた。

いわば、それは「劇場」なのであり、本書で上演される〈経験の実践のプロセス〉に、共感であれ、反感であれ、観客としての読者がみずからの生を重ね合わせ、自身の経験と対話することで、なんらかの意味の生成がなされんことを企図している……これらの手法

は、「作品」によって読者の経験を触発することも、社会過程の一部たる学問の実践的側面として社会生成の重要な回路である、という本書の主張に基づくものであり、それは、「作品」を通じた〈経験のミメシスのジェネラティビティ〉（本書の結論部である第8章で提示したタームで、経験の世代継承性のひとつのありようを概念化したもの）という実践にもつながっている。（小倉 2006: v）

このような記述のしかたに対しては、読者から以下のような感想が寄せられている¹³⁾。

著者（＝調査研究者）のバックグラウンドや3人の協力者（＝調査協力者）の方が語るそれぞれの人生が、私の経験として入って来て、それが社会との関係性の中で、私の中で再度形作られて行くという得難い体験を得る事が出来ました。これをベースに私自身の人生観をまた見つめ直し、問い直し続けたいと思っています。（50代後半の男性、括弧内は小倉による補足）

馬場さん（＝調査協力者）の考え方や生き方などに魅力を感じるという言葉では表せないような感覚…道を示してくれているというか、背中を押してくれているというか…いろんな著名な方が書かれている本で素晴らしいことや励みになる事、癒しになる事を言うのとは違ったもっと正直なずっしりと心に残る言葉の数々に心から励まされ勇気づけられました。また、小倉先生（＝調査研究者）の質問が私もそここのところ聞きたい！ということとストーンとはまっていてどんどん引き込まれていき、日常生活でちょっとした行き詰まりを感じるたびに馬場さんのインタビューを何回も何回も読み返した次第です。（40代前半の女性、括弧内は小倉による補足）

「経験として入ってきて」「得難い体験を得る」「魅力を感じる」「背中を押してくれている」「どんどん引き込まれていき」といった言葉は、さきのヴァン＝マーネンが述べた「経験を概念化するのではなく、我々がそれを生きるように経験を探究すること」「我々が真剣に関心を持っている現象、我々を世界に関わらせている現象へと向かうこと」に宿る〈生きられる経験性〉であり、感染的な関わりの局面をあらわしているといえないだろうか。

ここでは、読者は、作品（エスノグラフィ）から切り離された存在なのではなく、直接関わりあう存在となる。調査協力者と調査研究者が相互に変容していく調査関係における生きられた経験。その〈経験の実践プロセス〉の生成的記述が読者の経験の重ね合わせ（追体験）を可能にし、読者の参与をうながすことで、読者の経験を組みかえ、その生を再編していくという〈生きられる経験性〉。それが読者の実感のおよぶ範囲を押し広げ、新たな社会的文脈を生成していくのである。

〈社会学的感染力〉には、このような「関わり」を構築していくパフォーマンスが要請され

てくるのだろう。それは、社会学においても極めて手薄だった調査表現論と読者論（読み手とのコミュニケーション論）の要請である（小倉 2011）。すなわち、「コミュニケーション可能性を拓げていくための社会調査」（同上: 150）という発想から、「〈参与する知〉を仕掛けていく〈パフォーマンスな調査表現〉」（小倉 2013b: 244）が求められてくるのだ。さらにそれは、文字による表現だけでは収まりきらない問題になってくるのかもしれない。このシンポジウムの企画・司会者の岡原正幸さんは、現代アートや舞台芸術を参照しながら「身体性・共同性・現場性」を組み込んだ「パフォーマンス社会学」を提唱している（岡原編 2014）。

当事者研究と社会学との出会いは、それだけラディカルな射程と実践性をもっている。そのポテンシャルをいかに引き出していかか。それが、研究することの意味とともに問われているのだと私は思う。

【註】

- 1) テレビ朝日系「プレステージ」の「ゲイ・ライフ」特集（1991年10月23日放送）。テレビというメジャーなメディアで、ゲイ・レズビアン・バイセクシュアルの当事者が名前と顔を出して、自分自身の言葉で、専門家と対等な立場で語ったのは、日本ではこの番組が初めてであろう。のちにきいたところでは、番組の企画段階から当事者が入って意見を出していたそうだ（その当人であった伏見憲明さんへのヒアリングによる）。
- 2) 「感染」という言葉は、綾屋さんが試行錯誤しながら当事者研究会を進めていく過程で相談を受けたときに、私も使っていたようだ。以下のような対話を取りあげてくださっている。

綾屋 こういう研究をしたいっていうそれなりの方向性や意図があるものの、なかなかそちらに進まないんです。進みたい方向から外れないためには、どんどんルールを増やしていけばいいんでしょうか。

小倉 う～ん、うまくいかないことをすぐにルール化していくと窮屈だし、委縮して自由なコミュニケーションをしにくくなっていくからね。それよりも主催者本人が「こんな方向性の話をしたいんだよ」ということを、自分自身をまな板の上に乗せるつもりで正直に語り、それに参加者が徐々に感染していくような場ができていくといいんじゃないかな。それは主催者の特権性をなくすことにもつながる気がしているんだ。主催者側と参加者側というふうに関係性が固定化してしまうと、参加者は発言の善し悪しを評価されている感じを持ちやすくなって、フラットに対話が交差していく場にはなりにくいからね。だから安心して自由なコミュニケーションをしやすくするためにも、僕はまず自分をさらけ出す話をすることにしているよ。（Necco 当事者研究会 2013a: 279-80）（傍点は小倉による）

- 3) 「……既存の思考の枠組みに頼らずに『自分自身で考える人』だけが、事象そのものを見る可能性をもつのである。／だが、その『自分自身で考える人』自身の『思考』は、どうだろう。それがまた覆い隠すものであるということはないのだろうか。十分ありうるだろう。とすれば、事象そのものを見るためには、他の『自分自身で考える人』が必要になるだろう。つまり、他の『自分自身で考える人』と『ともに哲学する』

が必要になるのである。かくして、『自分自身で……』と『ともに……』は、矛盾していないどころか、互いに要求しあう。」（谷 2002: 16-17）

- 4) この授業では、強力な力をもって社会に流通している「コミュニケーション能力」「コミュニケーション障害」といった言葉に象徴されるように、コミュニケーションは相互的なものであるのに属人的なものとして自己責任を強いる社会状況や、社会的排除のコミュニケーション構造、その背景にある社会のコミュニケーション回路・環境の貧困の問題等について議論しており、このようなコミュニケーションをめぐる問題状況を経験的に学ぶためにお招きしたのであった。履修者 140 名ほどで、その 8 割は常時出席している授業であった。
- 5) 「社会学的想像力を、いかにして新たな社会的現実構築に参与するコミュニケーションを深化・展開させる〈参与する知〉としていけるのか」と言い換えてもよい。その意味でこの問題は、対話・熟議・デモクラシーの問題圏に通じている（小倉 2011）。
- 6) 「生きられた経験」にまで降り立ったとき、個やカテゴリーを超えて地続きとなった地平が見えてくる。それは「生き方次元での当事者性」の感受といってもよい（小倉 2006）。たとえば「同性愛者」「障害者」「高齢者」「被災者」といったカテゴリーに属するかどうかという次元では当事者ではなくとも、生きづらさや苦しみ、あるいは快や喜びの経験のなかで自らの居場所を見出していかにする「生き方」の次元では、誰もが当事者ではないか。たとえ同じカテゴリーに属しているという意味での当事者性や同一の理念を共有していなくとも、存在可能に向かって懸命に生きんとする経験の経路たる「生き方」の次元にまで降りていくと、そこに経験の重ね合わせの可能性（＝参与可能性）が生まれ、自分ごと（＝当事者）として了解されてくる。そこから新たなコミュニケーションの可能性がひらけてくるかもしれない（小倉 2014: 29-30）。
- 7) 「定着」の論理と「生成」の論理については、作田（1993: 30-33）を参照。
- 8) Necco 当事者研究会のこここさんは、「人前で自分の言葉を出すことで、自分にもわかっていなかった意味が立ち上がることがあって、それで自分の症状とあらためて向き合える」（Necco 当事者研究会 2013b: 297）のだという。同じく「発表すると別のことが見えてくる」というトウコさんは、「話してみた後は、『なんで苦しみをギュッと握りしめて縮こまっていたんだろう』と思えた。その手をパッとひらくことで、私の中で『あれもこれもこんがらがって切り離せない』と思っていた塊にヒビが入った」（同上: 300）と述べている。
- 9) 私は、ライフストーリーを次のようにとらえている。他者の人生をインタビューし、その人（語り手）の生きられた経験を理解せんとしていくなかで、聞き手である自分自身の生をも問われ、その相互行為の積み重ねから生み出される人生の物語であると。ライフストーリー・インタビューを実践する授業で「自分のことを話さない、ちゃんと聞けない。自分が背負っているものを話さない、相手は深いところを語ってくれない」という声があがることからわかるように、他者の生きられた経験を聞くという行為は、単に受け身で話を聞くことでも同調することでもない。自らの生（実存）を投企するきわめて主体的な行為である（もちろんそれは、他者からの呼びかけを受けとめることが前提としてあるのであって、「私」の主体的な行為だけでも成り立たない）。そして、この相互行為の積み重ねから生み出されるものこそがライフストーリー

である (小倉 2013a; 2014)。

- 10) 「当事者研究を行うときに、聞き手である他者は多いほうがよいと、よく言われる。なぜかという、一部の聞き手に対してのみ語っているのでは、その聞き手が理解できる部分でしか語りを受け止められないことになるからだ。また、聞き手が多いほうが、さまざまな視点からのフィードバックをもらうことで研究がより複眼的 (客観的) なものになる可能性が高まるとも言える」 (熊谷 2013b: 305)。私としては、聞き手である他者が多いだけではなく、相互行為の積み重ねのなかで聞き手 (そして語り手) が変容していくプロセスも、研究がより複眼的 (客観的) なものになるデータとなると考えている。
- 11) むろん、シンポジウムで熊谷さんも発言されたように、「仲間よがり」のフェーズは、ある段階においては、自己感の安定や存在論的安心感の醸成のために必要なメタフェーズであることを否定するものでは決してない。それもこの生成的プロセスに必要な一局面である。
- 12) 「学知 (理論) が生成される学問活動の土壌は、人びとの生命経験・生活経験・人生経験の土壌と地続きであり、研究という営みは、その『地続きの土壌』において実践的に検討されていくべきものであろう。そして学問主体たる研究者も、研究者である以前に生命経験・生活経験・人生経験を持ったひとりの生活者であることに変わりはない。その意味で、学知の最終判定人は、現実を生きている生活者である。／そういった学問姿勢をつらぬこうとすると、社会調査も、そこから引き出されてくる知見の確からしさも、この『地続きの土壌』における人間相互のかかわり合い (相互的・社会的なコミュニケーションによる相互了解) としてしか成り立たない。」 (小倉 2006: 555)
- 13) 前者は、拙著を参考文献 (課題文献ではない) としていた大学の通信教育課程のスクーリング受講者からの声、後者は、拙著の出版社に届けられた一般読者からの手紙からの声である。漢字かな遣い等は原文のままにしてある。

【文献】

- 綾屋紗月. 2011. 「アスペルガー症候群当事者の自己感と当事者研究の可能性」『臨床心理実践研究』6: 55-62.
- . 2013. 「当事者研究と自己感」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院. 177-216.
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎. 2008. 『発達障害当事者研究——ゆっくりしていねいにつながりたい』医学書院.
- . 2010. 『つながりの作法——同じでもなく 違うでもなく』日本放送出版協会.
- 熊谷晋一郎. 2009. 『リハビリの夜』医学書院.
- . 2012. 「なぜ『当事者』か、なぜ『研究』か」『日本オーラル・ヒストリー研究』8: 93-100.
- . 2013a. 「痛みから始める当事者研究」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院. 217-270.
- . 2013b. 「エピソード 当事者研究が語り始める」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院. 302-306.
- Mills, C.W. 1959. *The Sociological Imagination*. Oxford University Press. (=1995, 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店.)
- 向谷地生良. 2009. 『技法以前——べてるの家のつくりかた』医学書院.
- 向谷地生良・浦河べてるの家. 2006. 『安心して絶望できる人生』日本放送協会.

- Necco 当事者研究会. 2013a. 「発達障害者による当事者研究会」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院. 271-291.
- . 2013b. 「Discussion 当事者研究をやってみた」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院. 292-301.
- 小倉康嗣. 2006. 『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』慶應義塾大学出版会.
- . 2011. 「ライフストーリー研究はどんな知をもたらし、人間と社会にどんな働きかけをするのか——ライフストーリーの知の生成性と調査表現」『日本オーラル・ヒストリー研究』7: 137-155.
- . 2012. 「学知と現実のはざまでの愚直な対話」『日本オーラル・ヒストリー研究』8: 57-61.
- . 2013a. 「ライフストーリー——個人の生の全体性に接近する」藤田結子・北村文編『ワードマップ 現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社. 96-103.
- . 2013b. 「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ——なんのために、どのように表現するのか」浜日出夫・有末賢・竹村英樹編『被爆者調査を読む——ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会. 207-254.
- . 2014. 「生きられた経験へ——社会学を『生きる』ために」岡原正幸編『感情を生きる——パフォーマンス社会学へ』慶應義塾大学出版会. 14-36.
- 岡原正幸編. 2014. 『感情を生きる——パフォーマンス社会学へ』慶應義塾大学出版会.
- 作田啓一. 1993. 『生成の社会学をめざして——価値観と性格』有斐閣.
- 谷徹. 2002. 『これが現象学だ』講談社.
- Van Manen, M. 1997. *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy 2nd edition*. The University of Western Ontario. (=2011. 村井尚子訳『生きられた経験の探究——人間科学がひらく感受性豊かな〈教育〉の世界』ゆみる出版.)

(おぐら やすつぐ 立教大学)